

上郡町の偉人

「鵬程万里」第三十八回 中川由香

大鳥圭介

失敗は自己の責、成功は部下の功。理想の上司像

慶応四年五月頃の戊辰戦争中、圭介ら旧幕府軍は会津藩と共に、日光・今市近辺で、新政府軍と六、七回の戦闘を交えました。新政府軍の主力は、板垣退助ら率いる土佐藩でした。これに先立つ宇都宮の戦いの前夜、圭介の部下の大川正次郎が率いる伝習隊が夜襲で土佐兵を狙撃し、放火してその糧食を奪いました。為に土佐兵は飢えて気力無く、翌日の宇都宮城攻めに参加できませんでした。「土佐のお方は上州ちぢみ、見かけや強いよで着て弱い」と擲揄され、土佐は屈辱を受けていました。

今市は日光と会津への街道が交差し、新政府軍が会津に進出する重要な拠点でした。閏四月十九日、会津と旧幕府軍は大桑・柄倉の戦いで土佐との戦闘に勝利。更に新政府軍が占領する今市を奪取することに決しました。沼間慎一郎が隊長として兵を率います。沼間は会津で兵の訓練に当たっており、宇都宮戦の後、圭介に合流していました。沼間は北

関東までの戦闘は「略も勇も智も無い、戦争ではなくただの喧嘩だ。真の英雄男子の戦いを見よ」と豪語し、東西からの今市挟み撃ち作戦を立案したと、伝習隊浅田麟之輔は記します。沼間隊は今市街内を襲撃しますが、別方面から攻撃した会津貫義隊が早々に撤退し、各個撃破を受け敗れました。圭介は「敗戦は自分の謀略が至らなかつた為だ。兵を分けたのが失策だった。兵略が至らないのを恥じ、後の戒めとする」と日記に記しました。戦の発案は沼間ですが、圭介はそれを庇つたようです。

沼間は「このままでは兵は墮落し瓦解する、一挙に今市を襲うべし」と再度発案。翌五月六日、旧幕会津軍は総勢六百名で再び今市を攻めました。今市は要塞化され激戦となりました。大雨泥濘の中で旧幕会津軍は苦戦し、大被害を出しました。本営の守りを削ぎ兵を出すよう会津藩士が主張し、手薄になった本営が襲撃されます。本営の圭介は、直接敵

兵から雨のように狙撃される中、撤退しました。そして新政府軍土佐の谷干城が率いる増援が到着し、火力に勝った板垣は辛くも勝利しました。

旧幕会津軍は百名もの損害を出し、今市攻略を諦めました。その後圭介は、会津入口の藤原の谷間を二か月もの間、持久防御します。圭介は諸隊と地元獵師を活用し、アームストロング砲を携えた新政府軍佐賀藩を小数の兵で撃退。戦功あった浅田を称え、昇進させました。その藤原の戦いの前に、沼間慎次郎は大鳥と袂を分かちました。新聞記者島田三郎は「大鳥は人を訓練し服従させることは上手だったが実戦はあまり上手くなかつたと親友の沼間守一から聞いた」と述べます。沼間は明治で板垣の民権運動に身を投じました。板垣は「大鳥は道普請するので撃破するのは容易かつたが、沼間は神出鬼没で端倪すべからざるものがあつた」と述べました。また板垣は「今までは一度も敗軍した事の無い我隊」と自慢し、板垣は戦の天才とされました。実際は前述の通り、板垣と圭介は互いに勝敗がありました。

「大鳥様が配下を派し戦わせると不思議に勝つ、自分が出ると必ず負ける」と大鳥知己の外交官安藤太郎は述べました。しかし浅田の記録を紐解けば、今市の戦闘は二度とも圭介の配下の沼間の発案で、沼間を派して敗れたことが判明します。圭介は本営で弾薬糧食手配を行っていました。圭介はその敗北を自分の責として記しました。また藤原の戦いでは、圭介が直接指揮し、少数でも新政府軍に圧勝しました。圭介が自分で指揮し勝つた戦は他にも複数あり、安藤の発言は明らかに誤りです。

圭介は、部下の失敗は自分の責任とし、成功は部下の功績としました。明治で活躍する部下を慮つたのかもしれない。そうした圭介のあり方は、まさに理想の上司像の具現といえます。そして部下を庇い自分を敗軍の將と位置付けた謙虚さの為に、圭介は戦下手とされた面もあります。大隈重信は「圭介は少ない兵で武器を執り、奇策縦横、大敵に抗つてしばしばこれを死地に陥らめ、天下の大群に抗した」と事実を述べました。信頼性の高い記録から本当の評価を見極める資性が、圭介の在り方から問われているように感じます。